

市民の願いで再生 湧水の街

「どぶ川」に絶望… 掃除し水増やし緑も戻る



半袖でも汗ばむ陽気の5月下旬。スポンのすそをひきまきまくり上げ、そと足を水にひた

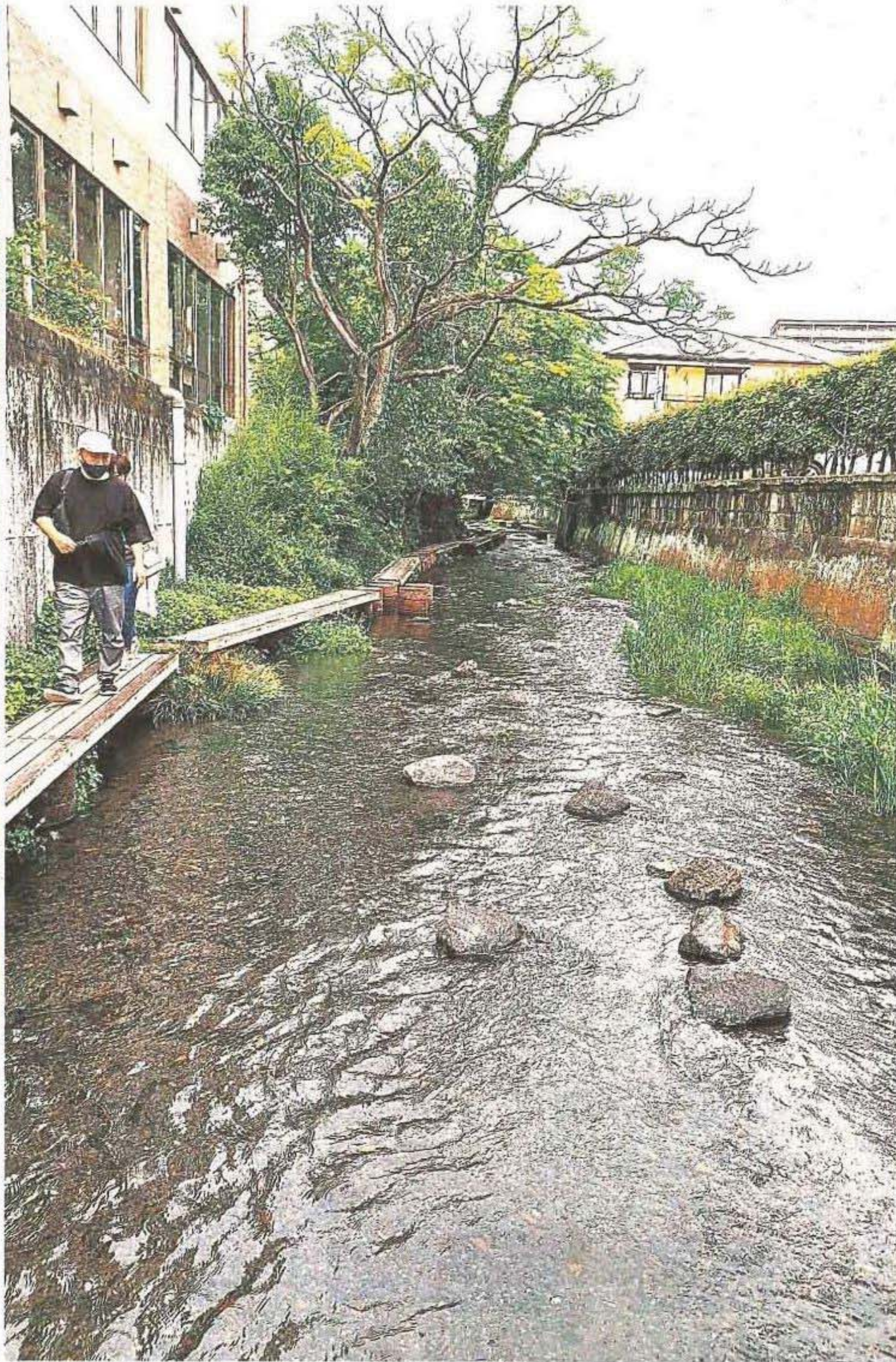
してみる。ひんやりと冷たいが、流れは優しい。水温はおよそ16度だ。じゃぶじゃぶと水しぶきを上げながら、上流に向かって歩いていけば、街の中を移動することができる。この街は、人々にそれを許している。

静岡県三島市では、富士山の雪解け水「伏流水」が市街地の至る所でわき出ている。市内を流れるいくつもの川の水はあくまでも透明で、歩くと小魚が足をつつく。特に大きく、人気なのは源兵衛川だ。初夏から秋にかけて、タモを手にした子どもたちが沢ガニやカエルを捕まえ、歓声を上げる。夜は乱舞するホタルを、川沿いのバーから眺めることもできる。

三島を象徴する源兵衛川は、下流の田畑を潤す灌漑用水路でもある。2016年には国際かんがい排水委員会が選ぶ、歴史的価値の高い「世界かんがい施設遺産」に選ばれた。国内でも環境省の「平成の名水百選」に認定されるなど、三島を「水の都」とらしめている。

だが、かつての源兵衛川は「どぶ川」だった。1960年代、富士山のふもとにいくつもの企業が工場を建設、毎日大量の地下水をくみ上げた結果、源兵衛川の水量は激減した。源兵衛川の水源の一つである名勝「楽寿園」の小浜池は、干上がった。「水に強い愛着を抱いていた三島市民の川への慈しみも、次第に薄れていった」。環境NPO法人「グラウンドワーク(GW)三島」専務理事の渡辺豊博さん(71)は振り返る。

三島にはかつて、楽寿園で発見された水草「ミシマバイカモ」が自生していた。清流の象徴だったが、環境汚染で姿を消した。復活に一役買ったのが、市民の寄付金で土地を買い取り自然を守る「シヨナルトラスト」運動の草分け「柿田川みどりのトラスト」会長の漆畑信昭さん(85)だ。柿田川は隣の清水町を主に流れ、1日120万トンの湧水と水質を誇る。「開発による川の破壊を止めたかった」という漆畑さんが活動を始めたのは75年。原生林を少しずつ買い取ることで、柿田川を守ってきた。渡辺さんらは漆畑さんから柿田川のミシマバイカモを譲り受け、95年に市内の湧水地を整備して植えた。



源兵衛川に設置された木製デッキを通過して散歩する人たち

だが同時に「俺のやることがある」とも思った。駆り立てられるように、川の掃除を始めた。91年には三島出身の詩人・大岡信氏らとともに「三島ゆうすい会」を設立。翌年にはGW三島の前身となる「GW三島実行委員会」をつくった。「ゴミ拾いツアー」や「川の観察会」を開催するなど啓発活動にも力を注ぐと、賛同する市民が徐々に増えていった。

GWとは、80年代に英国で始まった「実践的な環境改善活動」だ。住民が行政や企業と対立するのではなく、パートナーシップをとりながら地域の環境改善活動に乗り出す。GW三島は地下水をくみ上げていた東側に陳情、東しを使って川に流す冷却水を増量してもらった。冷却水なのできれいな水だ。これで水量は確保された。

「三島梅花藻の里」と名付けられたその湧水施設では、春先から白いきれいな花が水中で咲き誇り、年20万人の訪問者を魅しませる。清流でしか生きられないミシマバイカモだが、今では源兵衛川を始めとした街中の川にも生息、鮮やかな若緑が、水中をゆらゆらとたゆたっている。(岩本美帆)



住宅街には井戸も残されている。かつて住民が生活に使っていた「雷井戸」は直径3尺。今も清水がこんこんと湧き出ている

源兵衛川沿いの手押し井戸ポンプで遊ぶ子ども

柿田川の湧水の中で咲くミシマバイカモ。柿田川みどりのトラスト提供